

Title	荻生徂徠と十八世紀儒家思想
Author(s)	宇野田, 尚哉
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40124
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	宇野田 尚哉
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 12895 号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学位論文名	荻生徂徠と十八世紀儒家思想
論文審査委員	(主査) 教授 中村 生雄
	(副査) 教授 廣田 昌希 教授 小松 和彦
	(審査協力者) 名誉教授 子安 宣邦

論文内容の要旨

本論文は、近世日本思想研究における儒学思想史の大幅な書き換えをめざしたものであり、そのための斬新で刺激的な方法上の試みを随所に配しながら、壮大な展望を切り開こうとした野心的な研究である。内容構成は序章と本論全八章および結語からなり、400字詰560枚の分量に及ぶ。

まず「序章」で論及されるように、本論文においては構造主義以降の言説概念を踏まえ、従来の思想史研究が暗黙の前提としていた方法、すなわちテキストに記された個々の言説を発話主体の意図そのままのあらわれであるとする見方を否定し、それを発話主体の意図には還元されえない一定の規則性をもった効力として扱うことがめざされる。そのような方法的立場を鮮明にしたうえで、近世思想史の新たな構想を「十八世紀儒家思想」という枠組みのもとに提示し、そこでの最大の思想史上の特質を「言語論的転回」という視点から解明しようとするものである。

まず「第一章」では、問題の十八世紀にいたる前史としての十七世紀日本における儒家的「知」のありようを予備的に考察する。とくにここでは京学派朱子学者が出版という行為をとおして、不特定多数の読者にたいして新しく開かれた「知」としての朱子学を啓蒙していく役割が、「経書解釈の近世化」の側面から明らかにされる。またそうした動きの内部からそれを革新しようとした思想家として、「本当の朱子への回帰」をめざした山崎闇斎と、「本当の孔子への回帰」をとなえた伊藤仁斎の役割が考察される。

「第二章」から、本論文の中心課題である「十八世紀儒家思想」の新たな思想史的位置づけが試みられる。まず本章では、儒家的「知」の「言語論的転回」を主導した荻生徂徠の中国語にたいする独自の姿勢、要約すれば、中国と日本との言語的なへだたりを認識したうえでの思想上の「翻訳」という主題が論じられる。すなわち、中国語・日本語の言語的へだたりの認識から出発した徂徠にとって、「古代中国」とは従来の理解とは相違して、現在の日本を徹底的に相対化させる視点を提供する他者として登場してくることになった。徂徠によって言い出された古聖人の教えの普遍性は、このような言語論的な位相からみたまときはじめて、その真の思想史的意義をとらえることができると主張される。

「第三章」では、前章で論じられた徂徠の古代認識の新しさが、彼の『論語』理解の中核的著述である『論語徴』の解釈作業の考察をとおしてしめされる。つまりそこで徂徠は、『論語』が孔子の片言隻句までも弟子たちが収集したものであるため、相互に矛盾する個所をふくんだ精選不十分な書物であると見なす。そのうえで徂徠がとった『論語』への独自のアプローチは、朱子学においてのようにそこに記録された孔子の発話から不変の形而上学的意味

を読みとるのではなく、それを徂徠独自のコンテクストに置き換え、詩書礼学に象徴される先王の古代を語るものとして解釈することであった。

「第四章」では、前章での徂徠の古代理解の特質を、「聖なる言葉」から「日常の発話」への転換という視点に沿ってさらに敷衍して論じている。つまり、徂徠のこのような認識にもとづいて、従来『論語』などの聖典のなかに見出されていた「聖なる言葉」は、そうした絶対性・普遍性を剥ぎ取られて、文脈依存的・状況依存的な「日常の発話」に読み替えられ、通常の言語運用の水準に再定位されることになったとする。

「第五章」では、あらためて儒家的言説としての徂徠の言語論の特質をめぐって、伊藤仁斎の『語孟字義』にたいする徂徠の批判的な捉えなおしを足場にして、さらに徂徠学の代表的著述たる『弁名』による既存の儒家的言説の解体と再編のありようが論じ直される。そこでは、先王の制作になる「道」さえもが「立てられた名」であると理解されており、そうした理解を通じて、それまで漠然と眼前にあるだけだった事物、漠然と持続しているだけだった時間が分節可能となったと見る。このことによって徂徠は、古代以来の儒学説を徹底的に相対化する視点を確保したとされるのである。

前章までに考察した「言語論的転回」の事実をふまえて、「第六章」では十八世紀における「儒学史」という認識枠組みの成立が論じられる。そこで登場する「儒学史」の枠組みとは、旧来のように形而上学的観念の正統的な継承者をもって自任することではなく、中国古代以来の多様な学説をそれぞれ「一家の言」として相対化し、それらを展望する自己の立場をもまたそのうちの一つと見なすような性格をもつ。換言すればそのことは、特定の文脈から自由で、いつでも普遍的に妥当する「命題」が存立不可能となり、それに代わって、特定の文脈に沿ってのみ意味をもつ「発話」が前面にでてくるということであり、そこにこれまで論じてきた「言語論的転回」の一つの帰結が見られるということでもある。

さて、ここまででひとまず本論文の主要課題は論じ尽くされているとみてよい。が、それを補足するかたちで、以下の二章では、以上のような「十八世紀儒家思想」の編成下に生じた儒家的言説の社会的動向に関心がむけられる。

まず「第七章」では享保期以降にわかには隆盛を見ることとなった儒家的立場からの経世論の位置づけが試みられる。そこでは、儒家の経世論に特徴的な、「封建」と「郡県」の対比によって日本の現状を把握したうえでの諸施策についての考察が、太宰春台、中井竹山、荻生徂徠の事例を中心に展開される。

終わりの「第八章」では、儒家的「知」の諸階層への浸透という問題関心から、十八世紀彦根藩における藩校設立の経緯をめぐって、武士層にたいする徂徠学の影響の深まりとそれをめぐる藩内の葛藤のさまが、幅広い資料の博搜によって概観される。

さらに「結語」において、本論文全体の意義が確認されるとともに、残された問題点が今後の課題として言及される。

論文審査の結果の要旨

周知のとおり、戦後期の近世日本思想史理解の大枠を規制してきたものは、つい最近まで丸山真男による『日本政治思想史研究』であった。そこで中心的に描かれた近世儒学思想史の基本構図は、荻生徂徠を頂点として、それ以前の思想を徂徠学成立の前史のプロセスとし、それ以降を儒学思想の停滞現象と見なすものであった。言うまでもなくそこで丸山は、徂徠の認識の射程に入った公と私の分裂という事態に着目し、これを近代的思惟の基礎的要件と見なし、そこに西洋近代のそれに匹敵しうる近世日本の普遍的な思惟の可能性を確認したのであった。しかしそうした丸山政治思想史のパラダイムは、子安宣邦氏の『「事件」としての徂徠学』によって大いに揺すぶられることになった。そしてまた今度は、同氏の指導のもとに同書を肥沃な培養土として成長してきた申請者によって、さらに広範な思想的叙述の構想をもとに、丸山政治思想史への根源的な批判がいっそう精密に提起されたと言ってよからう。

さて本論文の特徴は、徂徠による朱子学批判の言説を「儒家言語論」という枠組みのなかに据え、それが十八世紀という時代の大きな転換期における思想史上の重要な出来事であったことを論証するところにある。徂徠が朱子学の形而上学性を否定して、それにかえて堯舜ら先王の制作になる中国古代の詩書礼楽の道を強調したのは言うまでもな

いが、そのことを論者は「言語論的転回」という文脈に沿って考察をくわえ、それを、超越的規範的な「聖なる言葉」が徂徠によって相対的状況依存的な「日常の発話」に読み替えられていったことだと判定する。またそのような革新的な思惟が可能になる前提条件として、徂徠の中国語にたいする独自の姿勢を論者は指摘している。すなわち、従来、漢文訓読（いわゆる訓み下し）をとおして彼我の言語的へだたりから目を逸らしてきた日本の儒家知識人のうちで、徂徠ははじめて両言語の異質性を正面からとらえ、異質な言語のあいだにおける思想の翻訳という問題に意識的になったのだという。徂徠にとって、聖人の世界たる古代中国とそれについて語ることばと、幕藩制下「トクガワ日本」のそれとは絶対的にへだたったものであり、だからこそ両者の関係は連続的なものではなく、互いに相対化されるべき関係にあるものとして認識されたということになる。このような経緯について、論者が徂徠の名著である『論語徴』や『弁名』の精緻な読解をとおして展開する論理はきわめて説得的である。

とりわけ本論文のなしたげた成果として特筆すべき点は、徂徠によるこのような中国古代への相対化の視線によってはじめて「儒学史」という問題が立ちあらわれてきたという指摘であろう。すなわち、古聖人による「聖なる言葉」がそれ以降の正統的な継承者をへて現在にまで変わることなく連続していると見なし、それを間違いなく受け継ぐことを儒家の最大の目的とするような旧来の態度が否定され、それらのテキストすべてを特定の時代に特定のコンテキストのもとに語られた「一家の言」と見なし、それら「一家の言」が次々に言い出されてくる過程として「儒学史」が整序されていくというのである。こうした認識の成立に着目したうえで論者が提出したものこそ、本論文の中心課題である「十八世紀儒家思想」という枠組みにほかならない。

このような思想史上の新たな地平への転換を、論者は言語論的に「命題」から「発話」への展開として定式化する。しかもそのような転換が、よりヴィジブルな表象として、林家の儒学者が描いた古聖人から朱子をへて現在の儒者までを一本の線で結んだ道統図（これは密教や禅の資師相承の次第を図示した血脈相承図の模倣であろうと思われる）のかわりに、孔子以来の多様な儒学説がそれぞれ「一家の言」としてその多様なありようを保持したまま図示される（伊藤東涯による「古今教法沿革図」）ようになる過程にもあらわれているとする。このあたり（第六章）の力強く説得力のある叙述は、方法論上の特質や課題設定について明快果敢に論じきった序章と並んで、本論文でもっともインパクトの強い部分であろう。（ちなみに付け加えておけば、すでに論者は自己の学説を自己のオリジナルな文体に託して表現するといった、文体上の技法を身につけつつあるように感じられる。）

このように才気あふれる論述と精力的な文献の博搜によって圧倒的な印象を与える本論文ではあるが、問題なしとはしない。それはまず第一に、論文全体の構成上の難点である。具体的には、儒家言語論の視角から徂徠の「言語論的転回」を考察した第二・第三・第四・第五・第六章を第一部としてまとめ、徂徠登場以前の儒家の「知」のありよう（第一章）、および徂徠以後における儒家の経世論（第七章）、さらには儒家的「知」の社会諸階層への浸透（第八章）などの周辺の主題群を第二部としてまとめたほうが妥当ではなかったかという点である。

また、本論文が学術誌等への既発表論文を中心に構成されているため、執筆時期それぞれの論者の問題関心が各章に別個の色合いを与えており、問題設定や論証の形式、資料使用の密度、さらには文体の調子に及ぶまで、かなりの変差が見られることである。統一された主題のもとに内容形式ともに万全の整合性を保持することが望まれる博士論文において、このような不整合が散見されるのは、論者の主張がパワフルで斬新なものであるだけに惜しまれるところである。

このような難点が指摘できるとはいえ、論者による先鋭な問題関心と新たな分析枠組み創出への意欲的な取り組みは大いに称賛に値するものであり、本委員会は本論文が博士（文学）の学位を受けるに十分な価値を有することを認定するものである。